【書　評】

# 森岡健二編著「近代語の成立」

飛田良文

## 一

森岡健二編著「近代語の成立」が刊行された。本書は副題に、―明治期語彙編―とあるように、明治期の語彙を中心にあつかった論文集である。明治期は研究がはじめられたばかりで、初学者のための入門書も、専門家のための専門書もきわめて少なく、本書の誕生は近代語研究者にとって待望のものであった。そして、東京女子大学の教え子の論文を加えたことは、新しい試みとして本書の第一の特色となっている。

第二の特色は、森岡健二氏の十六年間にわたる研究と思考の過程が、そのまま反映していることである。いいかえれば、序に述べておられるように、問題の所在を発見し方法を模索した時期のものと、方法的な問題で試行錯誤しながら明治期の訳語を具体的に検討したものと、漢語記述の方法を思索したときのものとがあり、それらが、森岡健二氏の問題意識の経過にしたがって配列されていることである。

第三の特色は、前半は訳語法を中心に、後半はその発展として漢字漢語の質の分析法を中心に、広い視野から問題を提起し、大きく概観しようとしていることである。そして、「文字形態素論」という独創的見解を発表している。

第四には、調査対象が辞書、翻訳書（学術書・小説）、聖書、新聞にわたり、主要な資料をほとんど含んでいることである。したがって、辞書は「英和対訳袖珍辞書」「英和字彙」「和英語林集成」「哲学字彙」など、翻訳書では「自由之理」「利学」「天路歴程」などの研究ともなっている。

そこで、まず、目次によって本書の内容を紹介しよう。

◇英和辞書における訳語◇

第一章　英和辞書における訳語の変遷
第二章　英和辞書に与えた蘭学の影響
第三章　英和辞書に与えた英華字典の影響
第四章　『英和字彙』における中国語訳の受け入れ

◇翻訳書における訳語◇

第五章　翻訳書に与えた英華字典の影響
第六章　西周の訳語

第七章　新約聖書の和訳
第八章　旧約聖書の和訳
◇現代漢語の特質◇
第九章　漢語訳の方法
第十章　現代漢語の成立条件
第十一章　文字形態素論
第十二章　学術用語の翻訳
第十三章　明治・大正・昭和の漢字漢語の変遷
第十四章　「和英語林集成」を通して見た漢語の推移
付表　人名索引　書名索引

以上のように、各論文は体系的に配列されており、四、六、十二、十三、十四の各章が学生のものである。

## 二

第一章は、英和辞書を訳語の特徴によって四期にわけ、各期の代表的な辞書の訳語を比較して、「訳語が日本人の基本的な象徴体系にもとづかないで、借用語に依存するようになった経路」（三四頁）を明らかにした。すなわち、明治五年以前の英和辞書は訳す態度が日本人と外国人とで異なり、日本人の訳語には句が多く、概念として説明しようとしていることを指摘し、その訳語が句から単語へ転換するさい、英華字典の訳語が影響していることを明らかにした。さらに、訳語を江戸語と明治になってあらわれた新造語とに分け、「維新よりわずか二〇年もしくは四〇年の間に語彙の半分が入れ代わる」（二三頁）ことを指摘した。しかし、「語彙の半分が入れ代わる」ということは江戸語の認定に「和英語林成集」（初版）を使用したことに問題を残しており、認定基準をきびしくすれば江戸語になるものがふえ新造語はもっと少なくなろう。

次に、「明治二年の『薩摩辞書』でその訳語は対校の結果堀達之助の『英和対訳袖珍辞書』（二版・三版）とほとんど同一で、ただ、ふりがなのつけてある点が違っている」（四頁）と述べているが、ほとんど同一であっても相違点はふりがなだけではないから注意を要する。

また、柴田・子安の「英和字彙」の訳語について「ふりがなを訳語の主体だと考える場合」と「ふりがなの施してある漢字を訳語の主体だと考える場合」とのありうることを指摘し、「実際問題として漢語とふりがなとどちらが主体なのか、判定に迷うような性質のものである」（一三頁）と疑問を提出し、ふりがなを訳語の主体として統計をとっている。

ふりがなは近代語資料の処理にあたっての重要問題で明治初期は江戸時代と同様に漢字片カナ交り文と漢字平がな交り文とではその用途がちがい、ふりがなも、漢字片カナ交り文と漢字平がな交り文でその役割が異なっていたようである。漢字片カナ交り文にふりがなのある場合、右は読み方を、左は意味を示すものがふつうで、たとえば、「欧州奇事花柳春話」（明治一一―一二年）では、「主人客ヲ熟視シテ曰ク」「再ヒアリスヲ回顧セス」「夜色暗淡トシテ」「古詩ノ秀絶ナル者ヲ教エ」などのように、右は送りがなとつづき、左はつづかない。そして、送りがなが「ス」「トシテ」「ナリ」などの場合である。（拙稿「欧州奇事花柳春話のふりがな」（国語学研究8）参照）一方、右だけのふりがなにも、送りがなとつづくものと、つづかないものとがある。つづかないものは、両側にあるふりがなの左にあ

るものと同じで、たとえば、「英氏経済論」（明治四年）では、「其変易正ニ絶止（ヤミ）シテ千種万様（イロイロサマザマ）ノ使用ト為テ消耗（ツブル）ス可シ」のようで、凡例にも「字傍ノ訓或ハ下文ヘ読ミ続ケ悪シキモノアル可シ元ト初学ノ記憶ヲ助クルニ備フレハ訓ニ由ラズシテ直ニ音ヲ以テ之ヲ読ミ下ス可シ」とある。すなわち、右にあって意味（訓）を示している。また、漢字平がな交り文については、中村通夫氏が「東京語の性格」で指摘しており、戯作がその典型で、ふりがなが本文で漢字はふり漢字である。

この立場から「英和字彙」をみると、その初版の訳語は漢字片カナ交り文であり、そのふりがなは「推辞（コトハル）スル」（Aporogize）「著明（イチジルシキ）ナル」（Apparent）「寺（テラ）ノ訴訟（ソシヤウ）ヲ管理（トリアツカフ）スル吏人（ヤクニン）」（Apparitor）のようで、意味を示すふりがなと考えられる。また、第二版の再版は、「推辞（コハトル）スル」「著明（イチジルシキ）ナル」「寺（テラ）ノ訴訟（ソヨウ）ヲ管理（トリアツカフ）スル吏人（ヤニン）」となっている。

第二章は、「英和対訳袖珍辞書」（初版）の訳語を「和蘭字彙」の訳語と比較し、その影響関係を調べたものである。そして、「英和対訳袖珍辞書」独自の訳語のうち、最も多数をしめているのは、名詞の漢語であることを明らかにした。そこで、これらの漢語がどのようにして訳語となったか知りたいところである。

昭和女子大学の「近代文学研究叢書」では堀達之助の曽孫豊彦氏が、英華字典の漢訳が参考に供されたと述べており、大阪女子大学の「日本英学資料解題」では、渡辺実氏が「Lobscheid から Medhurst の『Chinese and English Dictionary』を贈られた『Tatsinoski』が堀達之助であるのなら、当然それは一つの材料となったかと思われる。Lobscheid の署名は1885年2月の日付である」（八四七頁）と述べている。

なお、五四頁の用例で、「英和対訳袖珍辞書」の見出しが欠けているが、これは Ablative である。また、四二頁から五三頁にかけての「訳鍵」の例は、いずれも「改正増補訳鍵」の例である。

第三章は、中国にあらわれた英華字典とその日本への影響を明らかにした画期的な試みである。森岡健二氏は Lobscheid の「英華字典」を英華字典の代表として選び、英和辞典類と比較し、「明治初期に一般辞書に大量に取り入れられた中国語訳は『訳字』として位置づけられたり『ふりがな』によって注を施されたりして、いまだ外国語的性格が残っていた」「術語集に見える中国語訳は、一応日本語としての資格を与えられ、事実、現在まで生きているものが少なくない」（九〇頁）ことを明らかにされた。

ただ、英華字典として Lobscheid のものとだけ比較し、その他のものを使用されなかったことは、実際問題として原本を見ることが困難ではあるが、Lobscheid の影響を明らかにする上からも惜しまれる。

なお、六一頁で中村正直の「西国立志篇」について、「これはロブシャイドの影響を認めにくい」と述べられたが、一一六頁では「『西国立志篇』もまた、ロブシャイドの影響を受けている」と訂正された。

第四章は、「英和字彙」がどのような方式で中国語を借用したかを考察したものである。そして、「英華字典」と漢字が一致する漢語を借用中国語とし、そのふりがなの種類、漢字の質、意味を検討している。ただ、これら漢字の一致する漢語が中国語であっても、それがそのまま英華字典からの借用中国語といえるかどうかは問題

である。手続として、英華字典以前からある漢語を除くことが必要であろう。

第五章は、Lobscheid の英華字典が翻訳書の訳語にどのように使用されているかを明らかにしようとしたもので、第三章と対になるものである。「自由之理」「利学」「天路歴程」などを調査した結果、明治十五年頃を境として、Lobscheid の影響が弱まることを明らかにした。これは中国と欧米との文化の影響力が交代したことを示すもので、今後の研究への重要な目安となる指摘である。

また、訳文を「(1)ルビの機能にほとんどよりかからず、漢字に固定した音読もしくは訓読の語を用いた『自由之理』のような文章を硬文」と称し、「(2)ルビの機能をフルに利用して中国語を適当に意読した佐藤訳『天路歴程』のような文章を軟文」と称し、両者をはっきり区別する必要を述べ、硬文は「新しい漢語を多数輸入もしくは生産する」が、軟文は「新語の生産に余り役立っていない」という、近代語資料の質についての重要な事実を指摘した。

また、硬文は中国語の採り入れが分解的・逐字的であることを指摘し、「明治初期に相当多数の漢語の文字順が揺れていたことは興味ある現象で、当時の人は二字の漢語を一語として意識するより、漢字一字一字を独立した意味の一単位として意識していたのではないか」(一二二頁)と注目すべき発言をしている。

そして、この一字一字から二字の結合へと形態素が変化するところに、漢語の日本化、あるいは、語彙の近代化があるのではなかろうか。

第六章は、西周の新造語を明らかにして訳語法を追求した着実な考察である。ただ、一七八頁の「西独自の訳語」の心理学の中にある「能力」「情緒」の二語は、橋本左内の書簡に、また、一七三頁の「(2)西周独自と思われる語で典拠のある語」の「注意」が高野長英の「三兵答古知幾」に見えている。(佐藤喜代治先生「橋本左内の書簡に見える漢語について」、同「三兵答古知幾の漢語」参照)

第七章は、委員会和訳新約聖書の文章が用字・用語と構文の面で、漢訳聖書ときれいに対応することを証明したものである。そして、注目されることは、聖書は「ブラウンの主張により、振り仮名を本文と決定した」(一八四頁)という事である。これはふりがなのついた漢字が訳字であって訳語ではないことを示している。したがって、振り仮名を本文とするという翻訳委員たちの原則がどこまで維持されたかについて、「それが守られたのはどうも、ほぼ初版の出たころまでで、明治一三年洋綴じの活字版を発行して以後は、漢字仮名まじり文が普通になり」「振り仮名本文の原則を忘れたかのように」(一八八―一八九頁)と述べられているが、聖書の表記が、

明治一〇年版　天(てん)にましますわれらの父(ちち)よ
明治一一年版　てん　に　ます　われら　の　ちち　よ
明治一三年版　天(てん)に在(ま)ます我(われら)儕の父よ
明治一四年版　天ニ在(マ)マス我儕ノ父ヨ

と変わっても、それは表記上の問題であって、ふりがなが本文という原則は生きているのではなかろうか。そして、これと同じふりがなが本文という形式が、軟文の佐藤訳「天路歴程」と考えられる。

なお、一八四頁一行目と一八行目の「漢字くずし」は、一八九頁の福音新報の引用から明らかなように「漢文崩し」の誤りであり、一八九頁の「2、和文調の基礎に見られる漢字書き下し文」も「漢文書き下し文」であろう。

第八章は、委員会訳旧約聖書の訳文と漢訳聖書を比較して、その影響を明らかにし、新約聖書の場合と比較したものである。そして、翻訳委員によって、漢字の使用率が異なっているが、「漢字使用率は表記上の問題にすぎず、漢訳の受け入れ方では、全体がほぼ共通していると考えられる」（二四一頁）と述べ、文体にかかわってこないことを明らかにした。

なお「漢訳と一致しない語」については、漢訳聖書の漢字との影響関係の面からだけ比較しているが、実際には英訳聖書も利用されており、英語に堪能な高橋五郎のような人も協力していたのであるから、その方面からの考察も必要ではないかと思う。

第九章「漢語訳の方法」は、第二章から第八章までの方法論となっていたものである。漢語訳の方法としては、1.在来の語での置きかえ、2.古語の再生転用、3.旧漢語の変形、4.中国語の借用、5.仮借、6.造語をあげている。そして、中国語の借用では、S. Williams と W. H. Medhurst と W. Lobscheid のが英華字典として紹介されているが、第三章で紹介された蕃所取調所に数部備えられていた R. Morrison のも加えるべきであろう。

第十章「現代漢語の成立条件」は、今までの第一章から第八章までを各論とすれば、その上にたっての総論あるいは結論ともいうべき性格をもっている。そして、「訳語の歴史は、結局は『語』と『字』の分裂・遊離していた状態から、次第に一致する方向をとり、一致させることによって現代漢語形成上の土台をつくった」（二九七頁）と論じている。これは、訳語の歴史のみの問題でなく、広く語彙、文章、表記の分野にわたって関連のある指摘である。

なお、二九四頁で「学語篇」に関して「『典籍便覧』『名物六帖』『御談』『正音雑字』などから」とあるが、「学語篇」の凡例には「此編ハ典籍便覧名物六帖郷談正音雑字通攷等諸ノ類書ヲ主トシ」とあり、「御談」の「御」の誤植はともかく、「国書総目録」と「江戸時代書林出版書籍目録集成」に「正音雑字」が見えない。そして「郷談正音」「郷談正音雑字」がみえるので、疑いをはさんでおく。また、二九五頁の「学語篇」の用例は、ふりがなが左側にあるもので、「賞予（オモシロクタノシム）」は「賞豫（オモシロカタノシム）」、「激賞（オモシロイハナシ）」は「激賞（オモシロヒハナシ）」、「韻合（オモシロイ）」は「韻合（オモシロヒ）」である。

二九八頁の「増訂華英通語」の用例のうち、「大洲（グイシュウ）」は「大洲（タイシュウ）」、「土股（ハンジマ）」は「土股」、「水浅（アサセ）」は「水浅（アサリ）」である。

三一二頁の「近世小説字彙」は「書引小説字彙」、また、三一三頁の「(3)文字・形態素の不対応から対応へ」の例で、「カコ水手→水夫」は「水手（カコ）→水夫（スイシュ）」、「ヨモスガラ終夜→終夜」は「通宵（ヨモスガラ）→終夜」である。

第十一章は、森岡健二氏の現代漢語研究の出発点であり、時枝誠記博士が志しながらなしえなかったことを、独自の立場から発展させた、もっともユニークな論文である。まず文字が音声以上に意味の識別のきめてになっている場合を指摘し、「表音文字・表意文字の差にかかわらず『文字』が表意的に働いていること」を指摘し、「漢字を対象とした『文字形態素論』の一つの具体例を示した」ものである。そして、音と訓とは漢字形態素を中心に「き＝木＝モク」「みせ＝店＝テン」のようなパラダイム（派生表）を構成し、「他の外国語には例のない特殊な異形態を人工的に造り上げている」（三四〇頁）と主張する。そして、この立場からみるとき、日本語は

「中国語を大量に導入したが、その受け入れの特色は、完全な外来語としてではなく、多くを和語の異形態として、和語の体系に同化されてしまったことにある」（三四二頁）と指摘している。

また、漢字形態素の本質は二字合して、和語形態素相当のものを形成するところにあると考え、「和語形態素と漢字形態素は、語構成上の次元が異なる」（三四四頁）と主張している。

そして、この文字形態素論は十二章、十三章で実際に適用され、十三章で一部分修正された。

第十二章は、数学、物理学、鉱物学、哲学の学術用語の訳語を比較し、さらに、訳語の使用漢字の難易と、形態素の配列・結合の仕方を調査したものである。そして、一字漢語も二字漢語も、「C音訓流通の結合形式」である「C」と「C＋C」の結合形式が、どの分野にも共通してもっとも多いことを明らかにし、一般用語と相違のないことを立証した。

第十三章は、朝日新聞の社会面の漢字・漢語を、明治十二年から昭和四十三年までの九十年間にわたって、ほぼ一年おきに、各年約一〇〇〇字にふくまれる語、通算総計一七、九三五語（助詞・助動詞・固有名詞を除く）を調査した労作である。

その結果、「明治から大正にかけては、ほとんど仮名表記漢語が表われず」「大正末期常用漢字が制定されて以来、徐々に仮名表記の漢語が表われ出した。特に戦後は仮名表記漢語が徹底して使用されるようになった」（四一三頁）という。そして、漢字で書かれなくなったものは、形態上から見て「最も日本語に定着し難い漢字形態素を含む語」で、それは「漢字パラダイムの形成困難な字音専用結合形式」であることを明らかにした。

また、漢字表記語の量的推移を明らかにした（第六三表・六四図を参照）。そして、統計学を利用して最もよくあてはまる傾向線、$y=100-6.27511^{0.1890t}$ をもとめている。この傾向線は、指摘されているとおり、大正十四年頃からカーブが急になっているが、第六三表をみると、さらに分類できるように思われる。私は、明治九年から大正十二年まで、大正十四年から昭和十六年まで、昭和十九年から昭和四十三年までの三期に分けたらどうかと思う。これは、第六三表の $x/N$ を、0.85 以上、0.84～0.79、0.78 以下とした場合である。このように分けると、第一期と第二期の分かれ目には、指摘されているとおり大正十二年の常用漢字制定があり、大正十四年五月一日には大阪朝日新聞に「大毎と協定して新聞用漢字を制限」という記事がある。第二期と第三期との間には、昭和十七年の標準漢字表（二六六九字）が発表され、朝日新聞社では、昭和十八年三月十九日に「文部省案を基礎として常用漢字約三〇〇〇字を決定」し、同年十月十五日から「文部省標準漢字に六三八を加えた朝日新聞常用漢字を使用」している（朝日新聞社印刷局活版部の教示による）。朝日新聞社の漢字制限にしたがえば、第三期は昭和十八年からということになろう。このように考えると、漢字数はきわめて人為的理由によって減少しており、逆に、漢字数をふやす政策がとられれば増加すると考えられる。

なお、三八〇頁の単位分割の規則で、「(3)動詞と形容詞とが結合した場合、そのいずれをも一単位とする」の例、一寒く一ない一は用例として不適当である。また、三八一頁の「2.質的に見た漢字漢語」と三八八頁の「3.分類手順」の見出しは逆で、入れ換わっている。三九七頁六行目の「漢字の将来」には（注8）が落ちている。

第十四章は、「和英語林集成」の初版と三版とを比較し、三版で増補された一五、四九〇語の中から、「明治開化期に初めて登場した新漢語」を選び出そうとした労作である。この論文が発表されたとき、私はこの成果に注目したが、その後、蘭学資料の語彙研究が進み、佐藤喜代治先生、松村明氏、古田東朔氏、杉本つとむ氏、斎藤静氏などの論考が発表された。これらと比べると、古語・廃語を除くための基準が「大漢和辞典」「易林本節用集」「雅俗幼学新書」の三つであったため、蘭学関係から生じたと考えられる江戸時代の漢語が除かれていない。少なくとも、「文明源流叢書」所収の翻訳書を調査すれば、かなり正確になったものをと惜しまれる。以下、この論考にあやかって、四一三頁から四一五頁の新造語とされたものの中で、江戸時代に出典のある語を、私の気付いた範囲で指摘しておく。（　）内が出典である。

自然科学関係

医学　劇薬（三語便覧）、表皮（重訂解体新書）、結膜（解体新書）、胸膜（解体新書）、網膜（解体新書）、粘膜（解体新書）、脳膜（解体新書）、肋膜（内科撰要）、静脈（内科撰要）、聴神経（解体新書）、嗅神経（重訂解体新書）、視神経（気海観瀾広義）、験温器（気海観瀾広義）

化学　窒素（植学啓原）、水素（植学啓原）、燐酸（舎密開宗）、珪酸（舎密局必携）、硫酸（舎密開宗）、硫酸銅（植学啓原）、硫酸鉄（舎密開宗）、酸化（植学啓原）、金属（植学啓原）、成分（植学啓原）、酒石（舎密開宗）、酒石英（厚生新編）

物理学　引力（暦象新書）

数学　角度（暦象新書）

その他　農学（日本風俗備考）

社会関係

軍服（日本風俗備考）、局外中立（中外新聞三四号）

人文関係

文法　動詞（西文規範）、冠詞（和蘭文典字類）、主格（和蘭文典字類）、間投詞（挿訳英吉利文典）、接続詞（和蘭文典字類）、前置詞（和蘭文典字類）、代名詞（和蘭文典字類）、実名詞（和蘭文典字類）

著述　直訳（和蘭医事問答）

その他　劇場（航米日録）、発見（航米日録）、日曜日（航米日録）、土曜日（内外新報第三四号）、米国（各国新聞紙第一集）、洋酒（万国新聞紙第三集）

そのほか、「支那の翻訳書に用いた語を襲用した語」で、Lobscheidの英華字典と同一の語、省略したと思われる語、語順が逆になっている語、影響の窮われる語（四一〇―四一二頁）にも、江戸時代に出典のあるものが含まれている。たとえば、「圧力、喉頭、伝染、鼓膜、肋骨、小脳、物理、緯度、海峡、尿酸、星学、愛情、記号」がそれで、これらは、Lobscheid以外の英華字典の影響か、支那の翻訳書の語を用いたか、あるいは、日本人の造語か、調査する必要がある。

また、漢語の読み方の推移では、漢音呉音の交代、清音濁音の交代などが述べられているが、これらについては、拙稿「明治大正期における漢音呉音の交替」（近代語研究第二集）と同「明治大正時代における漢語の連濁現象」（東北大学文学部日本文化研究施設研究報告第二集）

があるので参照されたい。

索引で問題となるのは、人名索引の木本正栄で、これは本木正栄の誤りである。

## 三

以上、各章について新見の一部を紹介し、それに導かれて私の見解を述べてきたが、本書は訳語の形成過程における英華字典の影響を考察したこと、また、文字形態素論による漢字・漢語の質の考察を行なった点において、その発想および立証は、全く未開拓の分野を切り開いた画期的なものである。近代語の研究者にとって、また、近代語研究に志す人々にとって、本書は必読の書であり、本書によって資料の性格、研究法、そして、新しい着想をうることができるであろう。

近く、「近代語の成立—明治文体編」が刊行の予定とうかがっている。今後も、後学のために新しい知見をお示し下さるようお願いしたい。（明治書院　昭和四十四年九月十日刊　A5判　四四一ページ　四、五〇〇円）

—国立国語研究所　近代語研究室長—